

農業と美——十八世紀イギリス庭園論の ライト・モチーフ

安 西 信 一

今日我々は農業と美的な庭園を分離して考える習慣がある。例えば現代の日本語では、庭園が多少とも農業的色彩を帯びる場合「園芸」という別の範疇に属するものとして分類される。確かに英語では事情が異なり、「Garden」は美的庭園と農業的園芸の両方を含みうる。しかし、英語にも園芸の意の「horticulture」があるのは勿論、野菜を栽培する庭は「kitchen garden」農業的収益を旨とするものは「market garden」として各々美的庭園から区別される。更に「garden」が大規模な経済活動としての農業を指すことは、「the Garden of England」がイギリスの穀倉地帯を指すような比喩的用法に限られている。^(注1)

ところが今日の思考習慣の多くを生み出した十八世紀のイギリスでは、農業と庭園は極めて密接な関係にあった。これは当時「terraculture」なる語が造られ、それによって造園・農業・園芸等を含むしようとしたことからも窺えよう。^(注2)「因みに、日本語でも「には」の語は、古くは神事・狩猟・漁業・農事等、広範囲の活動の場を指した。^(注3)」。

周知の通り十八世紀のイギリスは、農業と庭園の両面で巨大な変革を

閲した時代である。農業について言えば、技術革新とエンクロージャー（囲い込み）の激増でその規模は飛躍的に拡大し、「農業革命」と言われるほどの事態が生じる。他方その農地に隣接する領主の館では、ヨーロッパ史上前例のない新しい庭園様式が生まれた。即ち従来の幾何学的・整形的・規則的な庭園とは全く異なる、自然風の「風景式」ないし「英国式庭園」(landscape/English garden)である。

本稿の課題は、未だ研究の不十分なこの農業（牧畜は除く）と庭園との関係を探ることにある。具体的には、当時大量に書かれた庭園論を時代順に追い、農業と美の対立および調和がそのライト・モチーフであったこと、更にそれが世紀を通じていかに変化したのかを示したい。^(注4)しかし、十八世紀の新しさを過大評価しないためにも、十七世紀後半の庭園論を一瞥しておく必要がある。

第一節 「収益」と「快」の共存——一六五〇年～一七二〇年

十八世紀以来しばしば考えられてきた所によれば、一般に十七世紀の知識階級ないし貴族は、牧歌的・美的世界に耽る余り農業の現実に無関心であり、十八世紀に市民的・商業的価値が重視されて初めてそれに関心を寄せるようになった。^(注5)しかし近年の研究が示唆する通り、恐らく貴族は十七・八世紀を通じて農業に強い関心を寄せ続けたのである。ただ兩世紀間で農業の実態が余りに変質したために、後の人々には十七世紀の貴族が農業に無関心なように映ったとする方が実情に近かろう。^(注6)

(1) ウェアリッジ・十七世紀後半の庭園論においても、農業の実践に対する関心は顕著である。と言うよりもこの時期の庭園書は半ば農業書、園芸書でもあり、そこではしばしばベーコンのユートピア構想と千年王国説に由来する進歩観の下、科学と宗教は融合し、農業的な「収益」(Profit)と美的な「快」(Pleasure)は共存している。^(注7)

ウェアリッジの『園芸大全または造園の技法』(一六七七年)は、それまでの庭園Ⅱ農業Ⅱ園芸書の集大成であり、人気も高く、この時期を代表する庭園論と言える。既にその全体の構成にも、園芸と造園、農業と美的なものとの混在が窺える。即ち本書を構成する三書の内、最初の一書は狭義の美的庭園を、後の二書は鑑賞用・食用植物の具体的栽培法を扱っているのである。更に例えは次の典型的な一節において、美的な庭園は農業的なものへと何の問題もなく移行しているように思われる。

快い並木、散歩道、果物、花、洞窟、その他庭園から生ずる様々なものを上手く構成した庭園は、……日々新たなもので想像力に糧を与える。／建築、素描、絵画、その他、最初に見、感じた時には眼や他の感覚に快く思えた精巧な作品も、長く接すると結局皆つまらなくなる。しかし庭園の快は、朝が来るたびに日々更新される。……庭園は極めて優れており、イギリス南部のほぼ全域で相応の庭園を欠く田舎屋は一つもない。殆どの人はそこに極めて大きな喜びを見いだすので、成長する花、葉草、木を見て自分自身で快く思うばかりか、婚礼・祭・葬式等、特別の折には、庭園で取れた適当なものを自分や隣人に与える。……庭園は厨房と食卓に種々の食物を供給し、本性を満足させるばかりか食欲をも楽しませ、……必要で有用かつ快い食用・薬用の珍品を提供する。^(注8)

ここで、想像力や感覚にもたらされる美的な快と、儀式・食事・医療に関わる農業的効用とは、庭園内部で矛盾なく共存している。また田舎屋がモデルとされていることから判る通り、ウェアリッジの対象とする庭園が小規模であり、彼のイメージする農業が先ずもって自給自足的なものである点にも注意すべきであろう。

(2) ナース…ところが十八世紀初頭になると事情が微妙に異なってくる。丁度一七〇〇年に出版されたナースの『幸福な田園』は、基本的な語彙や論旨の点で、ウェアリッジ等の十七世紀後半の庭園論と何ら変わらないものの、変化の兆候は随所に見られる。

例えばナースはこう断言する。「農業と植栽が、庭園の娯楽と同量の快と、それより無限に多くの収益をもたらすだろうことは異論の余地がない」^(注10)。言い換えれば、庭園は殆ど専ら美的な「快」のためのものであり、その農業的「収益」は無視し得るほど小さい。しかもそれが自明のこととされている。これは、美的な庭園それ自体がそのまま有益となり得るとするウアリジとは大きく異なろう。またナースは庭園を「快の庭園」(Pleasure Garden)と「野菜園」に分け、その外部に「林園」(Park)を設ける。ここにも美的な庭園自体に農業的効用がないことがほのめかされているが、更にその「林園」について次のように言われる。「[林園]には農地、農場および他の建築物を設け、田園の邸宅の利用と便宜に供さねばならない。と言うのも、貴族の家族に必要な立派な暮らしや出費が、雲の中から思いがけず供給されるなどと考えるはならないからである」^(注11)。ここで明らかなのは、領地経営が拡大し、ウアリジがモデルとしていた自給自足の経済を越えていることである。しかも、領地の周縁にある農地からの収益によって、農業的には不毛な貴族の美的生活が賄われるという、十八世紀に問題化して行く構図が予示されている。更にナースは、次のような注目すべき発言をする。「一糸纏わぬ田園を見るのは少々味気なさ過ぎよう。それを小さなエンクロージャー「囲い込み」で窒息させるのは、余りに農民染みており、鷹狩や狩猟のような野の娯楽の妨げとなろう」^(注12)。即ち農地、特にエンクロージャーを伴う新しいタイプの農地は、それ自体としては美的でないことが示唆されているのである。

勿論こうした「農業的に不毛な庭園」対「非美的な農地」という対立は、ナースにおいては未だ潜在的なものに過ぎない。これを明確に意識化し、しかも様々な形で調和させようとした所に、アディソン以下、十八世紀庭園論の新しいさがある。

第二節 不毛な庭園の批判と農地の庭園化

——一七二〇年～一七三〇年

(1) アディソン…風景式庭園のプログラムを初めて鮮明に打ち出し、それをジャーナリズムという新しい媒体に乗せて初期市民社会の公共圏に広めたのは、批評家・劇作家アディソンである。庭園についての彼の発言の内、造園に関する具体的指示が最初に現れる最も重要なものは、新聞『スペクテイター』四一四号のエッセー(一七二二年)であろう。しかし意外なことに、この名高いエッセーにおける庭園論の大半を占めるのは農業的な「収益」の話題である。

実際これほど多くの人が住み、他国よりずっと良く開墾されている「イギリス」の多くの部分で、「庭園に用いられる」これほど大量の土地を牧畜や耕作から遠ざけておけば、「庭園の所有者たる」個人の収益を損なうばかりか、公衆にも悪い結果をもたらさう。ならば何故、植物を頻繁に植え、領地全体を一種の庭園にしていけない訳があるう。それは持主の収益と快の両方につながるう。……穀物畑は快い眺望と

なる。その間を抜ける散歩道に若干手を入れ、牧草地が持つ自然の裝飾に対して、芸術を少し加えて手助けし改良しよう。幾つかの垣根の列を、その土地に生え得る木や花で際立たせよう。そうすれば自分の所有物を美しい風景にできよう。^(注13)

まず注目すべきは、ナースでは潜在的に過ぎなかつた旧来の庭園の農業的な不毛さが初めて明確に批判されている点である。それに代えてアディソンが唱えるのは、農地を庭園化し美化することである。逆に言えば、農地は本来美的でないということでもある。またこの農地が、「「垣根の列」つまりエンクロージャーを伴つた新しいタイプの農地である点にも注意せねばならない。

(2) スウィツァ…この旧来の庭園の農業的不毛さが広く認められつつあったことは、アディソンを受け継ぐスウィツァの実用書、『田園の相貌』(増補版一七七八年)にも窮えよう。

造園、植栽、農耕の営みは、我々の本性に良くまた心地良い全てのものを心身の両方に与え、他のどんな研究や職業よりも後世に益を残す機会を与える。／＼しかし第一のもの(即ち造園)に対しては、異論を唱える軽率なやからもいる。造園には出費がかかり過ぎ、余りに多くの土地やその類のものを、ほかの使用〔植栽と農耕〕から奪つてしまふと云うのである。実際、従来行われてきた類の造園についてならば、これはその営みに対する至極正当な非難である。^(注14)

この引用の第一文は、十七世紀庭園論の常套句の反復に過ぎない。しかしそれが今や、合理的出費を善しとするブルジョワ的価値観の前で自明性を失い、農耕と造園は対立関係に置かれていた。

この対立を解消すべくスウィツァが提唱する風景式造園法は、「領地全体を一大庭園に見」せること、要するに農地の庭園化である。それによつて、「田園の所領における快を与える部分と収益をもたらす部分は混合」され、「調和的に織り合わされる」^(注15)。

ところがスウィツァは、この農地の庭園化に対し次のような反論を予想している。「この田園的なやり方は、(蛇行線により)領地の畑を全て不規則な形や曲がりくねつたものに分断してしまふ結果、耕作に関して領地をだめにするという反論である」^(注16)。これに対し彼は、たとえ耕地の形が不規則的でも耕作は可能であり、自分はその実例を見たことがあると主張する。しかしこれは逆に言えば、当時一般に耕地は規則的であり、その方が収益が高いと考えられていたことである。勿論、耕地が規則的でなければならぬのは新しい農法が導入されたからである。スウィツァは、この種の新しい農地の美化を勧めているのであり、その限りでそれが美的でないことを認めている。

かくしてスウィツァに至り、非美的な新しい農地と不毛な庭園との対立を農地の庭園化によつて調和させるといふ方法は、完全に意識化され定式化されたと言えよう。

さて以上から、十七世紀後半以降十八世紀前半までの大まかな流れを、

次のように推定できるのではなからうか。——十七世紀の農業は比較的小規模であり、そのような経済の中にいる者には、庭園は美的でありながら同時に十分な農業的収益をもたらした。しかし十八世紀にエンクロージャーを伴う新たな生産性の高い農業が普及すると、従来の庭園がもたらす農業的収益は、相対的に殆ど無と化する。しかも新しい農地は、規則的つまり機械的であり、非美的なものと感じられた。そこでそれを解消するため新しい農地を美化し、従来の規則的な庭園ではない風景式庭園にしようとする方法が生まれた。^(注17)

第三節 亀裂の伏在——一七三〇年～一七六〇年

しかしこうして達成された農業と美との調和は、もとより常に亀裂を孕むものであった。既にスウィツァは、農地の美化が生産性と背反すること、そしてそれが一般的な見方であったことを示唆していた。この亀裂の存在は、特に一七三〇年代以降顕著になる。

(1) モリス…例えばモリスの『主として敷地・建物に関わる調和についての試論』(一七三九年)冒頭では、領地の「便利さ」(Convenience)と「美」が峻別されている。

建築者がまず気遣うべきは利便さである。彼は、水、木、牧草地、施肥された土地がどれほど豊富か、土壌の肥沃さを考慮せねばならない。……それらが達成されてはじめて、眼を喜ばせ想像力を刺激する

美が、支出の一部とならねばならない。／この美、適切さ、ないし調和が本試論の主題である。^(注18)

ここでは農業と美とが、対立するというよりは、寧ろ無関係な二つのレヴェルに置かれている。またここには、農業が庭園論的言説から排除されて行く傾向も読み取ることができよう。事実、一七三〇年頃を境に、従来多く見られた農業や園芸の詳細に関わる実践の手引は、少なくとも主要な庭園論からは消えてゆく。

(2) 初期ギルピン…農業と美の対立がより鮮明になるのは、後のピクチャレスクの理論家ギルピンが、若い頃当時最も有名な風景式庭園について書いた『ストウ庭園についての対話』(一七四八年)であろう。例えば、その庭園の中に作られた人工の廃墟について次のように言われる。

ポリプトン「こうした物は実にピクチャレスク〔絵画的〕で想像力に快い。……理由はよく判らないが、我々は最も完璧な豊饒と繁栄を備えた眺めよりも、この廃墟のような眺望に引き付けられる……」。

カロフィルス「……豊饒に満ちたほほ笑む田園〔農地〕では……植栽は規則的だ。……けれどもそのような規則性と正確さはいかなる仕方でも想像力の快を引き起こさない」。^(注19)

ここで不毛な廃墟の美は、規則的で非美的な農地の高い生産性と明らか

に背反している。

しかもこの対立は、ストウ庭園の周縁部において鋭い緊張へともたらされる。何故ならこの庭園は、初期風景式庭園の特徴的な手法、「ハハ」(ha-ha)を用いているからである。ハハとは、内側からは見えない隠し掘のことであり、それによって庭園外の農地等の眺めを内部に取り込み、或る意味で美化することができた。^(注20)確かにギルピンも、ハハの価値を一応は認めている。しかし彼の場合、それがもたらす農業と庭園の共存は、庭園の農業的な不毛さに関する苦い反省を導いてしまう。

ポリプトン「……もし僕が貴族なら、自分の領地を庭園にし、小作人を庭師にしようとするだろう。無用な寺院〔庭園建築物〕ではなく、農家を建て……道を美化し修復するだろう。田園は僕の労働力にはほほ笑み、大衆は僕の喜びを分かち合うだろう。このこれみよがしな作品〔ストウ庭園〕に何の意味があるのか。そのお陰でより良くなった人間がいるか。これこそ不愉快極まる金の浪費ではないか。^(注21)」

ここで批判されているのが、当時最も称賛された風景式庭園であったことを想起しよう。ギルピンはこの庭園が究極的には徳を向上させるとし、その有用性を納得させようと腐心する。^(注22)しかし庭園の農業的不毛さ自体は、結局最後まで否定されないのである。

第四節 排除と階層化——一七六〇年～一七九〇年

この農業と美の亀裂を解消するために農地を美化するという方法は、必ずしも多く実践された訳ではない。^(注23)寧ろ世紀の半ばを過ぎると庭園論の中では別の方法が顕著になる。即ち庭園を純粋な美的芸術へと高め、そこから農業を排除することで、両者の対立を回避ないし隠蔽するという方法である。

(1) ウェイトリ…庭園論から農業が排除される兆候は既にモリスにも見られた。しかし更にウェイトリは、当時の最も重要な庭園論、『現代造園論』(一七七〇年)の中で、庭園を高級な美的芸術へと格上げすることに於てそれを行う。

造園は、近年イギリスにおいて完成され、現在では自由芸術の中でも重要な地位を与えられている。……造園は想像力の行使であり、趣味に関わる主題である。そして今や、規則性の拘束から放たれ、家庭の便利さという目的を越えて拡大された。^(注24)

「規則性」がしばしば農業の換喩であったことは、もはや繰り返すまでもあるまい。

尤もウェイトリの庭園論は体系的・包括的であり、その中には狭義の「庭園」(garden)、「林園」(park)、馬で巡る「馬道」(riding)と並んで、「農園」(farm)も含まれている。しかし仔細に見るならば、や

はりのこの「農園」に関する論述にも、農業的なものを疎隔し排除する様々な装置を見いだすことができる。

まずウエイトリは、「牧歌的農園」(pastoral farm)と「古農園」(ancient farm)とどう二つのタイプの農園を挙げる。前者は古典文学の牧歌的世界を、後者は中世イギリスの農地を再現するものである。彼によればこれらは、「コビー」「虚偽」「嘘」であり、「模倣的性格」のものであって、場所の現実^(注26)に根差した「オリジナルな性格」のものとは区別される。つまりこれら二つの農場は、農業のあるがままの現実を、謂ば歴史的なフィルターによって意識的に遠ざけているのである。

確かにウエイトリも、現実の農地が庭園となる可能性を部分的には認めている。「或る部分は、これら模倣的な性格を二つともたない〔即ち牧歌的農園でも古農園でもない〕普通の素朴な農園として設計してよい」^(注27)。ところがこの農園でさえ、人を農業の現実^(注28)に直面させるものではなく、単に領主が行う「高貴な義務」の息抜きを提供するに過ぎない。

領主に自分の地位をいつも想起させる物は、彼に或る種の緊張を課すが、壮麗な館から時おり素朴な農業に退避すると気が安まる。……それは人生における地位を一時的に替えることであり、推奨すべき新奇さ、安らかさ、静けさのあらゆる魅力^(注29)を備えている。

従って、農業が単なる息抜きの範囲を越え、領主の地位を現実^(注30)に脅かす時、それは厳しく排除されねばならない。たとえ牧歌や中世イギリス

というフィルターによって距離を置いたとしても。

けれども「農園」が敷地全体を占めるならば、それは邸宅とはそぐわないものとなるように思える。……そうなるのであるじは小作人から十分に区別されず、自己の邸宅と財産に付随するものを懐かしみ、自己の領地が周田の田園と同じであることに傷つく。なるほど牧歌的農園や古農園は、普通の農園よりはやや上にある。しかしそれらですら、余りに館の近くにあると、館を畑の中におくようなことになり、館は見捨てられた剥き出しの観を免れない。館のすぐ周りには、或る程度の洗練と装飾が期待される。いかなる種類の農園であれ、それと邸宅との間には、どれほど小さくても「狭義の」庭園^(注31)を挟まねばならない。

このような農業の疎隔と排除は、ウエイトリが擁護する造園家、六十年代以降非常な人気を博す「ケイパビリティー」・ブラウンの造園によって現実のものとなる。即ちブラウンの庭園は、極めて巨大な芝地を持ち、しかも周田には帯状の植え込み^(注32)があつて、庭園外部にある農地の姿を完全に締め出すことができるものであつた。

(2) ゴールドスミスによる批判……しかし十八世紀には、領主の生活は依然農業からの収益に大幅に依存し、しかも農業の社会的重要性は十分認められていた。そのような状況の中でこうした農業の排除を行えば、欺瞞的であるとの批判を免れ得ない。例えばゴールドスミスは、詩『廃村』(一七七〇年)の中で、ブラウンの庭園によって立ち退かされた農

村を嘆く。

富と虚栄のやからは、多くの貧民が提供した場所を取り上げ、自分の湖、庭園の広野、馬、馬車、猟犬のための場所にしてしまう。富者の体をゆったりと包む絹のローブは、近隣の畑から収穫の半分を奪い去った。彼の地所は、……その芝地から怒って農家を追い出してしまふ。……こうして専ら快だけのために飾られた土地〔領主の庭園は〕は、不毛な輝きを放ち、弱々しく没落を待つ。……飢餓に喘ぎ非嘆に暮れた農民が、皆を引き連れてほほ笑む土地から去り、やがて助け起こす手もなく倒れる時、田園は花咲く。——一方は庭園の花として、他方は墓の花として。^(注31)

(3) ウィリアム・メイスン…こうした非難を免れるには、美的庭園からの農業の排除をより巧妙な方法で行わねばなるまい。即ち農業の価値を十分認め、その存在を取り込みつつ、同時にその美的地位は剝奪するという方法——階層化の方法である。例えばウィリアム・メイスンは、その詩『イギリスの庭園』(一七七二—一八一年)において、造園家||領主にこう呼び掛けている。

造物主の創り給うた人間、勤勉な人間は、天の最初の法によって、働くことでパンを得るべく定められた。彼の最初の武器、鋤とその刃を持たせ、彼を荒野に立たせよ。すぐに変化が訪れ、荒野は黄金色の

収穫ではほほ笑むであろう。……そうなった時に、今度は汝の芸術に力を奮わせ、既に均らされた土地に、変化に富む線で仕上げの優美を与えさせよ。／湿った谷間も、労苦の手を想像力が導くならば、その手に従い、適切な改良を受けるであろう。しかし想像力は労働を導くのであり、労働に従ってはならない。……想像力が仕事を支配せねば、細い溝が退屈な平行線を成し、鋭角で交差するだろうから。それゆえ想像力の助けをすぐに呼ぶこと。無慈悲な鋤が余りに深く大地の懐を傷付けないうちに。^(注32)

確かにここでは、プロテスタント的に解釈されたウエルギリウスの『ゲオルギカ』(農耕詩)に依拠することで、農業が人間の第一の責務とされ、農民は英雄となっている。^(注33)しかし農民は謂ば盲目に突進するだけであり、放置すれば醜い規則性が生じてしまう。それゆえより広い視野を持つ想像力と芸術が現れ、土地に変化と優美とを与えねばならない。つまり農業には十分な価値が認められながら、しかしそれ自体の美的地位は剝奪されているのである。この階層化の方法は、より秘匿された仕方、ピクチャレスクの美学に受け継がれて行く。

第五節 ピクチャレスクの無差別により取り込み

——一七九〇年～一八一〇年

(1) ウォールポール…十八世紀のイギリスでは、庭園を含む現実世

界を絵画として見るといふ、所謂「ピクチャレスク」な視覚の方式が普及した。^(注34) 例えば既にウォールポールは、そのような視覚方式に基づいて、ハハの効果を記述していた。

田園の表情は、何と豊かで楽しくピクチャレスクなものとなったとか。壁を取り払うことで、あらゆる改良された土地が開かれ、ここを通じて、次々に続く幾つもの絵画の中を通っているようだ。しかも、たとえ改良され場所「農地」が趣味を欠いたとしても、全体の眺めは多様性によって美化される。^(注35)

即ち、ハハという「単純な魔法」^(注36)によって、農地の醜さは絵画の画面全体における単なる多様な一部分として取り込まれ、美化されてしまうのである。しかし更に、世界を常に絵画として見ることができれば、もはや世界を美化するにはハハすら必要でない。そのような視覚のメカニズムを論じたのが、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてのピクチャレスクの美学であった。

(2) ナイトとプライス——ピクチャレスクの美学…この美学については別に論じたので結論のみを言えば、現実世界を絵画として見ることによって感得されるピクチャレスクな美とは、究極的には、単なる「明暗と色」のみに存する「純粹な視覚美」^(注38)のことである。逆に言えば、いかなる対象でも快い明暗と色を示しさえすれば、無差別に美を持ち得る。つまりピクチャレスクな視覚方式にとっては、対象の純粹に視覚的

な形式のみが意味を持ち、便利さ、快適さ、有用性といったその質料ないし現実存在に関わる事柄は全く関心の外にある。

家庭的便利さや安逸ではなく、ピクチャレスクな効果こそが、風景〔画〕に関する著述家が考察すべき事柄である。景観に至る道が、砂利、灰、石灰、その他いかなる素材でできていようと、彼には全く関係ない。ただその色が余りにけばけばしく、境界が余りに際立ち、眼に不快な目だった非調和的な線を生み出さなければそれで良い。^(注39)

そうであるならば、たとえ農地であっても、快い明暗と色を呈する限り常にピクチャレスクな美を持ち得よう。従って、ウエイトリやブラウソンのように農地を疎隔し排除することは無意味になる。否、それは余りに新興ブルジョワ的、成金的ですらある。

私はエンクロージャーと農家の保存を推奨し、不毛な芝生のために広大な農地を犠牲にするのには反対した。……畑を囲む垣根は、平らな土地で水平に見るならば、景観を豊かにし美化する。……畑を囲む垣根を邸宅から非常に遠くへ移し、広大な遮るものない芝地を見せるのが習慣になっている。なるほどそれは広さを誇示し、虚栄心を満たすであろうが、住まいの快適さや美に資するとは到底思えない。……耕地のエンクロージャーが完全に醜いなどということは決してない。^(注40)

ここでナイトは、ブラウンの風景式庭園の農業的な不毛さを非難し、農地が美たり得ることを主張しているのだが、その口調は、世紀初めのアディソン等が従来の整形式庭園の不毛さを非難した口調と酷似している。と言うよりも寧ろ、ピクチャレスクの理論家達は今や権威と化したアディソン等の言説を意識的に反復しているのである。しかし両者の決定的な違いを見落としてはならない。即ち、アディソン等が現実の農地を・実・際・に・美・化・し・よ・う・と・し・て・い・た・の・に・反・し、ピクチャレスクの理論家は現実を変革しようとはしない。彼らはハハという「単純な魔法」すら要求しない。彼らを変えようとするのはただ、世界を見る主観の視覚方式のみである。ナイトが言うように、ピクチャレスクな美は「外的対象の内」にはなく、専ら「外的対象を見、考量する方式と習慣の内」にこそ存在する^(注41)のである。かくして十八世紀の庭園論を悩ませ続けた農業と美の対立は、単なる主観的な視覚方式の問題へと解消されてしまう。それどころか、そもそも明暗と色のみからなるピクチャレスクな美の無差別的な観点からすれば、農地と庭園の区別自体が解消してしまうのである。

しかし勿論、対立ないし排除は別の形で残存している。即ち今度は主観の能力的な格差、階層化という形で。と言うのもピクチャレスクな美は、絵画に慣れ親しみ、現実世界から明暗と色のみを抽象する「習慣」を身につけた人々、要するに文化的エリートしか見えないのである。例えばもう一人のピクチャレスクの理論家ブライスは、自らの対話編の中で絵の素人に次のように語らせている。「何故、絵画に慣れ親しんだ眼と、私のような人間の眼との間には、これほどの驚くべき違いがある

のでしよう^(注42)。なるほどピクチャレスクの美学において、農業は再び美しいものという地位を獲得し、美的世界の内に取り込むことが可能なものとなった。しかしその農業の美は、実際に農地で働く人々、農民には決して見えない。ここで巧妙な階層化と排除が行われていることは明白である。

それを裏書するのは、貧民に対するピクチャレスクの理論家たちの態度であろう。確かに彼らは、風景、更には庭園の中に貧民を導き入れ、そのピクチャレスクな美を認めている。しかしピクチャレスクな視覚方式にとつて、貧民は殆ど人間ではない。

人類の中で単にピクチャレスクな対象は、ジプシーや乞食といった放浪する種族に見られる。彼らは、ピクチャレスクという性格を彼らに付与する諸性質の全てに関して、森の野生動物、やつれた荷馬車馬、更には古い粉挽き小屋、あばら家、他の同種の無生物に極めて近い。^(注43)

ギルピンの言葉を借りれば、ピクチャレスクな眼は「人物を単に景観の装飾としてのみ見る^(注44)」のであり、貧民の現実生活はその関心の外部にある。注目すべきは、ここで美的な地位を復権しているのが、「ジプシーや乞食といった放浪する種族」に限られている点である。つまり彼らは謂は遠く離れた存在であり、ピクチャレスクな眼を持つ領主の生活を実際に脅かすことはない。ところが、領主の最も身近にいたはずの労働者（往々にして貧民）、即ち農民に関して、ピクチャレスクな美が語られ

ることはないのである。人物像の美的性質を論じた先の引用文でも、「荷馬車」を引き、「粉挽き小屋」で働き、「あばら家」に住む農民の姿は、奇妙にも抜け落ちてゐる。なるほどこうしたピクチャレスクの美学に見られる道徳的責任の回避は、ロマン主義以降批判されることになろう。^(註4)しかし幾人かの論者の主張が正しいとすれば、ピクチャレスクな視覚方式は現代にも根強く残存してゐる。^(註4)例えば我々は、農業と美を現実と調和させようとする試みを、殆ど自動的に回避する習慣を身につけてゐるのではなからうか。もしもそれらを論ずることは本稿の範囲を逸脱するであろう。

注

註1 Worlidge, Nourse, Switzer, Castell, Morris, Gilpin(註2), Whately, Mason, Walpoleの著者だが New York and London: Garland Publishing, 1982' Knight, Price, Gilpin(註3), の著者だが Westmead, Farnborough, Hants: Gregg International Publishers, 1971-72 のリプリント版を用いる。

註2 O.E.D. の "garden" の項を参照。
 註3 Michael Leslie and Timothy Raylor, eds., *Culture and Cultivation in Early Modern England: Writing and the Land* (Leicester and London: 1992), p.1.

注3 『岩波古語字典』他による。

注4 十八世紀イギリスの風景(論)及び風景画(論)における農業の問題を扱った主な研究として以下のものがあり、特に Bermingham のものには庭園に関する節も見られるが、しかし庭園論におけるこの問題の研究は未だ不十分であるように思われる。John Barrell, *The Idea of Landscape and the Sense of Place 1730-1840* (Cambridge: 1972); id., *The Dark Side of the Landscape* (Cambridge: 1980); Michael Rosenthal, *British Landscape Painting* (Oxford: 1982); Ann Bermingham, *Landscape and Ideology: The English Rustic Tradition, 1740-1860* (Berkeley and Los Angeles: 1986). 尚アディンソン、コールドスミス、ウォールポールに関する本稿の叙述は、次の拙稿のものと部分的に重複する。安西信一「開かれた庭園のプラトニックス—十八世紀イギリス庭園思想の歴史的俯瞰(1)」、『表現における主観性と観主観性』(平成三・四年度文学研究費研究報告) 37-52頁。

注5 この様な考え方の最も早い例は、ウェルギリウス『ゲオルギカ』のクラティデム訳(一六九七年)のアディンソンが付けた序文の内にも見られる。"An Essay on Virgil's Georgics," *The Works of the Right Honourable Joseph Addison*, ed. Tickell (London: 1804), V, esp. 445, 454. 最良の例として John Barrell, *Dark Side*, esp. pp. 8ff.; David Solkin, *Richard Wilson: The Landscape of Reaction* (London: 1983), esp. pp. 22f.

- 注28 Ibid., p.171 ; cf. pp.151ff.
 注29 Ibid., p.174.
 注30 Ibid., p.176.
 注31 Ibid., pp.176f.
 注32 Lancelot "Capability" Brown (1716-83) の職業名・園芸師だがその職務にだけ留まらずに、Thomas Hinde, *Capability Brown* (London:1986) ; David C. Streatfield, "Art and Nature in the English Landscape Garden," *Landscape in the Gardens and the Literature* (Los Angeles:1981), p.59, cf. pp.63f.
 注33 Oliver Goldsmith (1730-74), *The Deserted Village* (1770), lines 275-82 ; 285f. ; 299f. (原文は韻文)
 注34 William Mason (1725-97), *The English Garden : A Poem* (1772-81), Book I, lines 104-07 ; 123-28. (原文は韻文)
 注35 十八世紀のイギリスを代表する『メトロポリタンの庭園』の著者として、John Chalker, *The English Georgic* (Baltimore:1969). 同書 Chalker の序言に Mason は「庭園師としての Mason は、庭園師としての Mason の存在を証明する」
 注36 上掲の『メトロポリタンの庭園』を参照。
 注37 Horace Walpole (1717-97), *The History of the Modern Taste in Gardening* [1785] 1827, p.278. 本書の著者は「ヤリ」ではなく「庭園師」
 注38 Ibid., p.263.
 注39 安西信一「ゴクチャレンスクの美学理論」『美学』158 (1989), 39-49 ; 「不透明な絵画と錯綜体としての世界」『東京大学文学部美学藝術学研究室紀要『研究』9(1990), 90-111 ; "Gilpin, Price, and Knight," *Aesthetics*, ed. The Japanese Society for Aesthetics, No.5(1992), 65-76.
 注40 特にお礼「ゴクチャレンスク」43頁参照。尚ナイト・プライスは、キレユンの用いた「ゴクチャレンスクな美」(picturesque beauty) という用語を「ゴクチャレンスクな美」(the picturesque) と同様に用いた。同書は、同様に「美」を扱った。
 注41 Richard Payne Knight (1750-1824), *The Landscape, a Didactic Poem...Addressed to Uvedale Price, Esq.* [1794] 1795, p.82n.
 注42 Ibid., pp.40ff.n. ; p.45n.
 注43 Knight, *An Analytical Inquiry into the Principles of Taste* [1780] 1808, p.196.
 注44 Uvedale Price (1747-1829), *Essays on the Picturesque* (1810), III, 273.
 注45 Ibid., I, 63.
 注46 William Gilpin, *Three Essays ; on Picturesque Beauty ; on Picturesque Travel ; and on Sketching Landscape : to Which is Added a Poem, on Landscape Painting* [1792] 1794).
 注47 Malcolm Andrews, *The Search for the Picturesque* (Stanford

: 1989) pp.2364.

注 46 安西「ピクチャレスク」、45頁注(1) (3)に挙げた文献参照。
(あんざい・しんいち 広島大学総合科学部)